

東海道五十三次 今と昔

松井 恒雄

初代広重の代表作「東海道五十三次」は多くの人々に愛されている作品です。広重の描いた風景を追って、これを写真に収め、昔と今を対比させようというものです。長い歳月のうちにすっかり変貌してしまった風景が多いなかで、昔の面影を残したままの風景もありました。1997年は広重生誕200年。広重の残してくれたすばらしい作品、そして現在の風景写真を前に、歴史を振り返ってみるのも一興ではないでしょうか。

東海道は江戸を起点とする主要な五街道のひとつで、江戸・日本橋と京都・三条大橋を120余里で結んでいました。慶長6（1601）年徳川家康が東海道の整備を命じ、宿場や伝馬制などが急速に整えられました。今日知られる53宿となるのは、やや後の時代です。東海道は、仮名草子「竹斎」や十返舎一九の滑稽本「東海道中膝栗毛」など小説、あるいはまた、浄瑠璃や歌舞伎の舞台になっています。浮世絵でも、早くは菱川師宣の「東海道分間絵図」という長大な絵図的作品があり、庶民の旅への関心が高まる江戸末期には、北斎や、広重の師匠の豊川豊広らが、旅人や宿場の風俗を描いた沿え揃物（シリーズ）を描いています。東海道は主要な街道であったのみならず、江戸時代の文化を生み出す母胎でもあったのです。

安藤広重（歌川広重・1797～1858）

1797（寛政9）、幕府の定火消（じょうひけし）同心・安藤源右衛門の長男として生まれる。1809（文化6）、13歳の時、両親を相次いで失う。1811（文化8）年ごろ、敬川豊広に入門。1812（文化9）年ごろ、師から広重という画号を与えられる。1831

（天保2）年ごろ、「東都名所」を発表。1883（天保4）年ごろから、全55枚の大作「東海道五拾三次」を世に送り出し、名所絵師としての名声を獲得。その後も、さまざまな街道絵や名所絵を次々に発表。1856（安政3）年からは、江戸の名所所を集めた「名所江戸百景」を手がける。1856（安政5）年、62歳で没。



東海道五十三次 今と昔



日本橋



五十三次 今と昔



広重 東海道五十三次 [日本橋]
通信総合博物館蔵

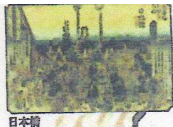
Nihonbashi



慶長9(1604)年、この橋は日本の里程の起点として設けられ、東海道の
起点となりました。

東海道五十三次 今と昔

箱根



郵便はがき

50

INTERNATIONAL LETTER WRITING WEEK

30

5十三次 今と昔

8. 6. 3

神奈川県 箱根町

五十三次 今と昔

広重 東海道五十三次 [箱根]

Hakone

郵便はがき

50

8 1 6

7. 3. 13

神奈川県 箱根町

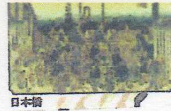
売価 70 円
再生紙はがき

富士山

湖の向こうに姿を見せた、穏やかで美しい富士山は、険しい山々ともうまく調和しています。

箱根の山々は鮮明な色彩で象徴的に表現され、その山中を進む大名行列は蟻の行列のようです。湖の向こうに姿を見せた、穏やかで美しい富士山は、険しい山々ともうまく調和しています。

東海道五十三次 今と昔



蒲原

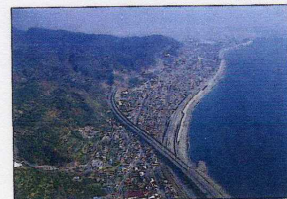


五十三次 今と昔



広重 東海道五十三次 [蒲原]
通信総合博物館蔵

Kambara



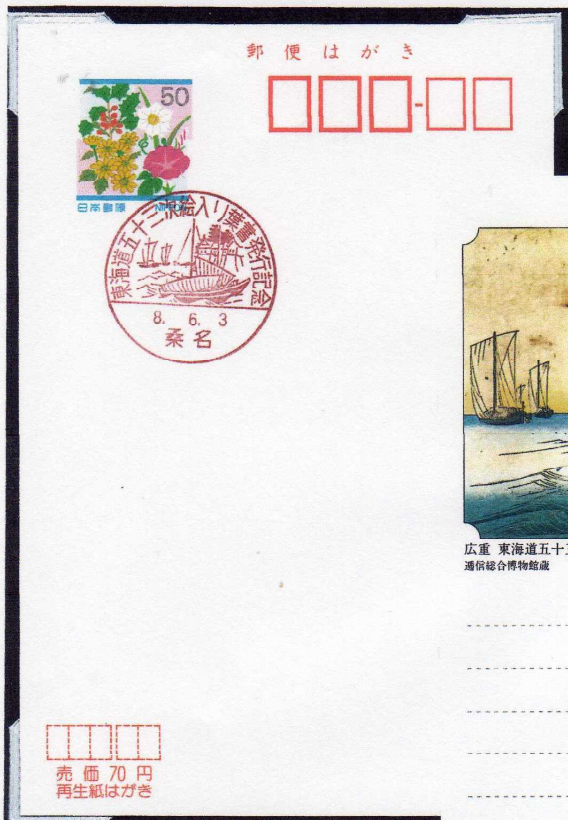
夜の雪景色は、まるで墨絵のように描きあげられ、味わい深い表情を見せています。わずかに歩く人々は前かがみの姿勢をとり、厳しい寒さが伝わってくるようです。

東海道五十三次 今と昔

桑名



日本橋



五十三次 今と昔



広重 東海道五十三次【桑名】
通信総合博物館蔵

Kuwana



桑名の風景は、吹きわたる風や寄せる波の音を想像させ、白帆をいっぱい
に広げた何艘もの船には、港の繁栄ぶりがうかがえます。対岸の宮より
桑名までは、間遠渡といわれる約七里の海の路です。

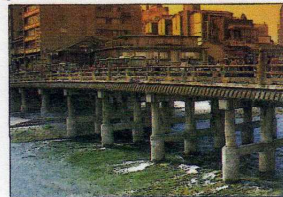
東海道五十三次 今と昔

京師／京都



広重 東海道五十三次 [京師/京都]
通信総合博物館蔵

Keishi/Kyoto



三条大橋を渡ると、東海道の旅もようやく終わりを迎えます。日本橋より約130里(約511km)、14日ほどの旅の果てに眺める都の風景は、どんなにか旅人の心を動かしたことでしょう。